

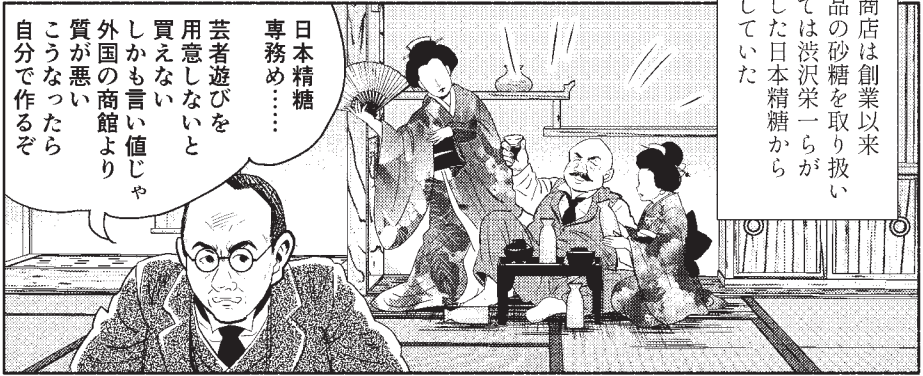
第2章

鈴木商店

関門海峡へ



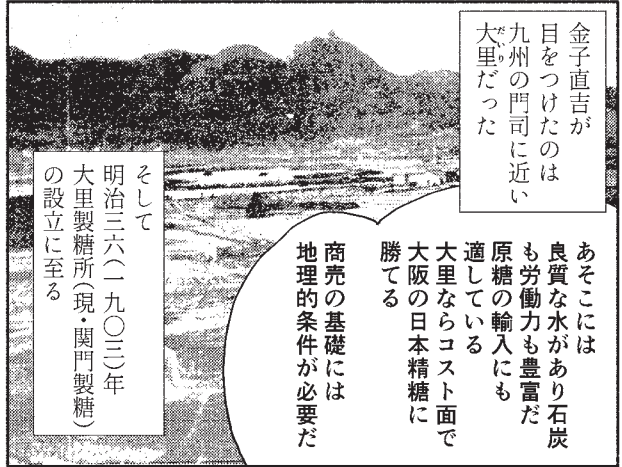
鈴木商店は創業以来
輸入品の砂糖を取り扱
国内では渋沢栄一らが
設立した日本精糖から
調達していた



日本精糖
専務め……

芸者遊びを
用意しないと
買えない
しかも言い値じや
外国の商館より
質が悪い
こうなったら
自分で作るぞ

金子直吉が
目をつけたのは
九州の門司に近い
大里だった



あそこには
良質な水があり石炭
も労働力も豊富な
原糖の輸入にも
適している
大里ならコスト面で
大阪の日本精糖に
勝てる

商売の基礎には
地理的条件が必要だ

そして
明治三六（一九〇三）年
大里製糖所（現・関門製糖）
の設立に至る



何!?!
鈴木商店が?
ふん
あいつらには
できんよ
……そうだな
「大里の水には
アンモニアが
入っている」とでも
噂を流しておけ

その噂は
大里製糖所建設中の
鈴木商店の耳にも入る



あいつら
こんな噂を流して
いるらしいです

そんなもの
ほうって
おけばいい

我々は事業に
邁進すればいい
この煉瓦一枚が
いづれ馬蹄銀
一枚になるっ!



噂はともかく
肝心の砂糖の製造が
うまくいかないことは
金子直吉を
おおいに悩ませた

うーんなんで
固まった砂糖しか
出てこないん
じゃ……
しかし改善する
技師も職工も
大里にはおらん

まず砂糖製法の秘訣は
砂糖の色素を取り去り
無色透明にしてこれに
硫酸を加えて
ブドウ糖に変化させる
これを「ピスコ」という
この流動体を下から
ピストンで押し上げて
噴霧状態にして吹き込む

砂糖が
固まるのは
「デイスイン
テグレーター」
という砂糖を
攪拌する機械を
……

!?

素晴らしい!!
君はいつたい?

……実は私は
日本精糖の
職工なんです

なんと!?

ご存知の通り
専務は芸者遊び
ばかりです
そういう人に
使われるのは
もう嫌で暇を
取って来ました

金子さんは品行方正で
日夜真面目に
事業のために奮闘して
おられると知り……

私らが酒や女を顧みず
日夜真面目に働くのも
幾分でも世の中のため
になりたいと思うからだ

さあ
一緒に働こう
やないか!

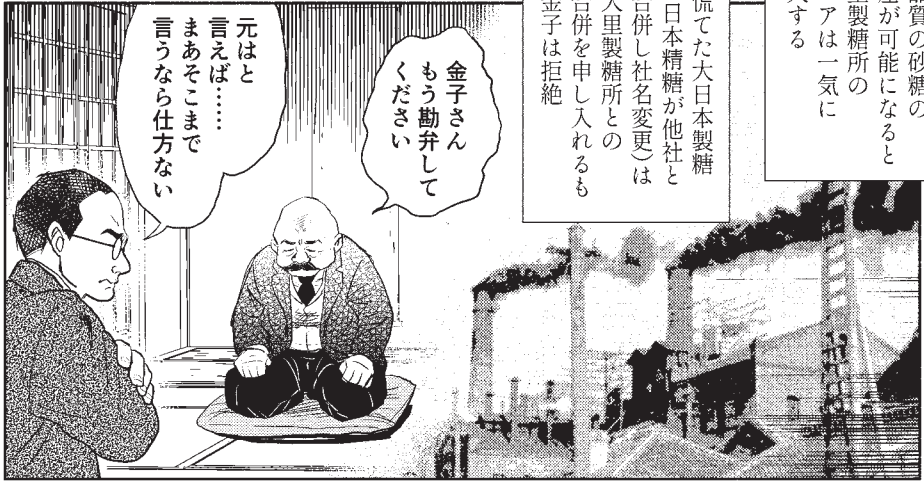
こうして様々な
困難を乗り越え
大里製糖所は
砂糖生産に成功した

高品質の砂糖の
生産が可能になると
大里製糖所の
シェアは一気に
拡大する

慌てた大日本製糖
(日本精糖が他社と
合併し社名変更)は
大里製糖所との
合併を申し入れるも
金子は拒絶

金子さん
もう勘弁して
ください

元はと
言えは……
まあそこまで
言うなら仕方ない

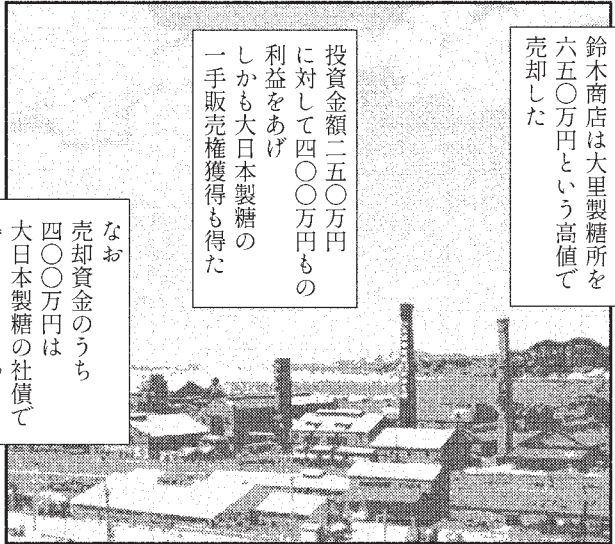


明治四〇(一九〇七)年
鈴木商店は大里製糖所を
六五〇万円という高値で
売却した

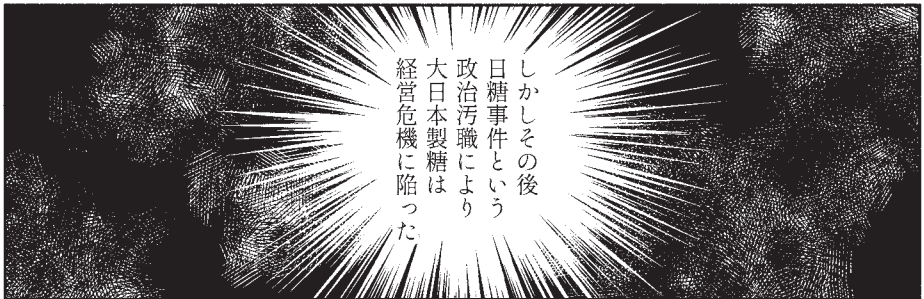
投資金額二五〇万円
に対して四〇〇万円もの
利益をあげ
しかも大日本製糖の
一手販売権獲得も得た

なお
売却資金のうち
四〇〇万円は
大日本製糖の社債で
得ることになった

残りも早く現金に
して次の事業を始め
たいところだが……



しかしその後
日糖事件という
政治汚職により
大日本製糖は
経営危機に陥った



そこで
財界の重鎮
渋沢栄一は
大口債権者である
金子直吉を
飛鳥山の自宅に
招いた

